

The Mill on the Floss 試論 : Maggie Tulliverの 行動規範について

池園, 宏
九州大学大学院文学研究科 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/6786995>

出版情報 : 九大英文学. 32, pp.53-70, 1989-11-20. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :



The Mill on the Floss 試論

— Maggie Tulliver の行動規範について —

池 園 宏

序

George Eliot の第二作目の長編小説である *The Mill on the Floss* は、自伝的要素が濃い作品であり、Leslie Stephen の指摘する通り、主人公 Maggie Tulliver の成長を通して作者自身の精神的遍歴 “a spiritual autobiography” が描かれていると言えよう。¹ エリオットはマギーを “a character essentially noble but liable to great error — error that is anguish to its own nobleness”² と称し、気高く美しいものに盲目的な憧憬を寄せるが故に、周囲の平凡かつ世俗的な環境との間の相剋に悩む主人公の姿を鮮明に描き出している。マギーに対する作者の執着、傾倒ぶりには並々ならぬものが感じられ、その結果他の登場人物の性格造形が、程度の差はあれ比較的リアリティーに欠け平板に墮している印象すら与える。また、マギーが中心的に取り扱われすぎているが故に、周囲の人物相互の人間関係の描写が希薄になっているという事実は否定できない。しかしながら、マギーの人物描写はこうした諸々の欠点を補える程十分に複雑かつ魅力的であり、その存在感は精彩を放っている。

エリオットは小説中において、「性格は運命である」とする Novalis の提言に訂正を加えている。

For the tragedy of our lives is not created entirely from within.

“Character” says Novalis, in one of his questionable aphorisms —

“character is destiny.” But not the whole of our destiny.³

人生の悲劇は性格という内的要因のみからではなく、社会という外的要因と個人の間に生ずる避けられない軋轢の中から誘発される。“[T]here is no private life which has not been determined by a wider public life.”と他の作品においてもほぼ同様のことが述べられている。⁴ この小説は、外部世界に積極的に働きかけては挫折、反発し、試行錯誤を繰り返すマギーの精神的葛藤の剋明な歴史である。小論では、周囲の環境に制約を受けつつ人生を歩む主人公の思考及び行動を吟味し、一連の行動の決定要因となる価値基準を周囲の登場人物との関わり合いを考慮に入れて検討することによって、この作品におけるエリオットの意図を考えていきたい。

I 愛の欲求

マギーは生来情熱的で感受性が強く、「愛し愛されたい欲求」“the need of being loved, the strongest need in Maggie's nature” (p. 89)、“this need of love, this hunger of the heart” (p. 91) が人一倍強いという性質を備えている。彼女は周囲に自分の愛情を注ぐ対象を見出し、その対象から存分に愛情を注がれることによって、初めて自己の内なる能力を十分に発揮できる人物である。⁵ この愛の欲求が如何にマギーの行動と関わり合い、彼女の価値基準の一つとなっているかを考察していきたい。

マギーの愛の欲求は、現実には彼女が思い願うようには満たされないことが多い。マギーがどのように自分に関心を引こうとしても、Dodson 一族を主とする周囲の人々は大抵の場合、その気持ちを汲むことなく期待を裏切る態度に出て彼女を失望させる。愛されたい願望は人間が本来自然に持ち合わせている感情であろうが、マギーの場合それが余りにも強固すぎるが故に、また彼女が未成熟であるが故に、それが適えられない際には、衝動性や攻撃性を伴った極端な行動となって現れる。自分を等閑にして従妹の Lucy と戯れるトムに憤慨したマギーは、思わず彼女を水溜りの中に突き落としてしまう。自分を理解してくれない母や伯母の Mrs. Glegg の叱責に遭った直後、マギーは一人屋根裏部屋に閉じ籠り、呪物に釘を打ち込んだり柱に叩き付け

たりして怒りを紛らす。また、櫛通りの悪い濃い髪を母や親族たちから非難されると、衝動的に髪を鋏で切ってしまう。こうした動物的とも言える自暴自棄な一連の行動は、愛の欲求の強烈な裏返しと考えることができ、満たされぬ心に一種の精神的カタルシスをもたらすものである。

自己を満足させてくれるものには愛着を覚えるが、自己を抑圧するものには嫌悪感を覚えて攻撃的になるという態度は未発達な愛情の在り方であり、その背後には自分がこうありたいと願う自惚れにも似た自己理想化の考えが働いている。このことは、マギーが空想好きであるという事実如実に反映されている。彼女は辛い仕打ちを受けたり孤独だったりするとき、非現実的な架空の世界を自分の想像の中で作り上げることを得意としている。

Maggie could think of no comfort but to . . . fancy it was all different, refashioning her little world into just what she should like it to be. (p. 101)

想像の世界で思い描く自己の姿は、周囲の人々から敬い慕われる美しい王妃と化す。日頃自分が子供であるが故に相手にされず、また無器良であることを意識させられるマギーの内なる切実な願望が表出している。衝動的にジプシーの元へ逃走したのも、愚鈍な彼らは聡明な自分を必ず歓待してくれるに相違ないと自分勝手な想像を巡らせた結果である。このように、マギーは往々にして現実と空想を混同し、後者を前者に当てはめようとする傾向がある。自己充足的な想像の世界に浸るのはマギーの求めて止まない心が思い通りに満たされない為であり、空想癖はマギーの愛の欲求の強さを端的に示す一例であると言えよう。それでは、こうした観念的なマギーの願望は現実にはどのような対象に、どのような形で向けられているのかを見てみたい。

生涯を通じてマギーの最も深い愛の対象となるのは、“the two idols of her life” (p. 371) と称せられる兄の Tom と父の Mr. Tulliver である。トムに対しては、“I love Tom so dearly, Luke — better than anybody else in the world” (p. 81). や “But you oughtn’t to hate me, Tom: it’ll be very wicked of you, for I shall be your sister” (P. 216). といった直接的な愛情

表現が全編を通して随所に見受けられ、マギーの思慕の情を強く伝えている。二人の兄妹関係の深さはさらに吟味、検討を要する問題だと考えられるので後の章で詳述したいと思うが、ここではトムがマギーにとってかけがえのない敬慕の対象であり、その愛情が渴望されていることを述べるに留めたい。一方、タリバー氏は娘に対し生涯揺らぐことのない父親としての絶対的な愛情を注ぐ。マギーは自分が子供の頃、周囲の者から非難されたり嘲笑された時に、父が常に味方となって庇ってくれたことを後年になっても忘れたことはなかった。

Delicious words of tenderness! Maggie never forgot any of these moments when her father “took her part:” she kept them in her heart and thought of them long years after, . . . (p. 125)

絶えず自分に対して暖かい愛情を示す父に対するマギーの依存心及び信頼度もまた無条件に絶対的である。向う見ずにジプシーの元へ逃走しようとする際でさえ、父にだけは自分の安否を手紙で通知しようと内心決意していたし、ジプシーの村で恐怖感に苛まれた時に無意識の内に保護を求めたのは父の姿であった。一家の破綻を境に病床に伏せるタリバー氏を陰で暗に非難する母と兄に憤慨したマギーは、“[Y]ou ought not to let any one find fault with my father”(P. 284). と孤軍奮闘する。父こそが「私の深く強い愛の対象」⁶であったと述懐したエリオットとマギーを照らし合わせて考慮すると、父と娘の愛情の絆が如何に強固なものであるか納得がいく。

トムの学友である Philip Wakem は、書物に勤しみ芸術的感覚を兼ね備えた賢明な少年であり、高貴なものに憧れるマギーの知的好奇心を満足させてくれる初めての存在である。フィリップは出会いの時点から彼女に対し仄かな恋心を抱くが、それは後年時を経るにつれて強烈な狂おしいまでの愛情へと変化していく。これに対し、マギーは特別な対象として穏やかな親愛の情を示すが、情熱的で官能的な真の恋愛感情を抱くまでには至らない。⁷ しかしながら、フィリップから愛の告白を受けて、“like a dream — only like one of the stories one imagines”(p. 435)と述べるマギーの様子には、空想

裡で思い描いていた、誰かに愛される状態に自分が今置かれていることへの喜びが満ちている。さらに、フィリップが生来不具であるという事実も、マギーの愛の渴望を充足するのに十分な要素である。

Maggie moreover had rather a tenderness for deformed things; she preferred the wry-necked lambs, because it seemed to her that the lambs which were quite strong and well made wouldn't mind so much about being petted, and she was especially fond of petting objects that would think it very delightful to be petted by her. (p. 252)

自分が保護を施した相手の喜ぶ姿を見て悦に入るという自己満足的な虚栄心の入交った憐愍の情が、フィリップとの親交の中に存在したことは否定できない。マギーのこの自己本位な考え方は成長ともに修正され、相手の内面を尊重する真の友愛へと変化していくが、その根底には常に自分を必要とする対象への愛の欲求が存在している。

さて、マギーがフィリップとより一層深く関わり合い傾倒していく過程には、父親の破産による一家の没落という看過できない重大な契機が存在する。失意の底にあるタリバー氏の関心は専ら借財の返済と Wakem への復讐へと向けられ、彼は以前程マギーに十分な愛情を注げなくなる。同時に、父の志を受け継ぐトムも、聖書に向って復讐を誓い一家の再建に全力を傾けるが、その結果マギーのことを顧みようとしない敏腕かつ厳格な實際家へと変容していく。現実的で理性的なトムと空想的で感情に流されやすいマギーの間に亀裂が入るのは自明である。二人の崇拜する人からの愛を一度に失い生きる術を失って自己放棄の念にまで達した頂度その折に、マギーはフィリップと数年ぶりに再会する。この符号は決して偶然のものではなく、作者の意図的な設定であると解釈したい。抛り所となる対象を喪失し精神的危機にある際に、別の抛り所となる対象が登場し主人公に感化を与えるという状況は、エリオットがよく用いる構成上の手段である。⁸ そして、マギーのこうした微妙に揺れ動く心理の背後には、常に求めて止まぬ愛の欲求の精神構造が大きく

く作用していることは明白である。マギーが Stephen Guest に惹かれていく過程にも、これと同様の要素が働いていると言えるのではないだろうか。このことを念頭に置いて二人の関係を見ていきたい。

スティーブンは女性的なフィリップとは対照的に男性的な魅力に溢れ、マギーの感覚的本能に直接訴えて心に動揺を与える人物として提示されている。⁹ マギーは出会いの場面から今までにない胸の高まりを覚えるが、これは彼女の中に特定の異性への意識が芽生えたことを示している。スティーブンは、ボートに乗ろうとして足を滑らせたマギーを力強く支えたり、庭を散歩する際に好意的に彼女に腕を貸したりするが、これはマギーにとって非常に心地よい経験となる。

[T]he sense of help — the presence of strength that is outside them [women] and yet theirs, meets a continual want of the imagination. (p. 521)

心惹かれる異性に注意を留められ、紳士的に手を差し伸べられるという経験は生まれて初めてのものであり、スティーブンの行為はマギーの愛の欲求に添うものである。その後、マギーは恋の「見えない力」“the invisible influence” (p. 534) に翻弄されて二人の仲は急接近していく。愛の告白をしてくれたフィリップ、スティーブンと既に婚約を交したルーシー両者への配慮から、マギーは一時的に彼を退けるが、結局は彼の強引な説得にあって自ら愛を認め、感情の赴くままに誘惑に負けてしまう。

フィリップとの親交が、トムや父との精神的離反が動因となって急速に深まったことは先に述べた通りである。これと同じ過程が、スティーブンの場合にも当てはまる。彼と初めて出会う直前に、マギーはフィリップと無断で密会することをトムから固く禁じられてしまう。フィリップの父はタリバー氏を破滅の途へと追い遣った憎い敵であり、厳格な正義感を持つトムにとって二人の内通は絶対に許し難い事実なのである。トムに代って継続的に親愛の情を注いでくれたフィリップとの交際を断絶させられたマギーは、この時点で再び抛るべき対象を失った非常に不安定な心理状態であったと言えよう。

She felt lonely, cut off from Philip—the only person who had ever seemed to love her devotedly, as she had always longed to be loved. (p. 491)

絶えず頼りとする相手を必要とするマギーにとって、こうした喪失感の中でスティーブンに惹かれていくのは当然の成り行きである。半ば放心状態で河を流されていくマギーの耳元で囁かれるスティーブンの愛の言葉は、まるで「至上の美酒」の如くマギーの心に響く。

To poor Maggie they [Stephen's words] were very near: they were like nectar held close to thirsty lips: there was, there *must* be, then, a life for mortals here below which was not hard and chill—in which affection would no longer be self-sacrifice. (p. 594)

愛情が自己犠牲とならない人生とは即ち、愛する対象が次々と失われて自己の満たされぬ心が空回りすることのない人生のことであろう。スティーブンの愛を限りなく享受できる喜びの人生が開かれるという幻想を脳裏に描いて、マギーは彼と行動を共にしてしまうのである。また、二人の最初の出会いの場面は、最愛の父の死という悲しみの直後の章で始まっているという事実も、同様の理由でマギーの不安定な心の移行の一因を暗示するものとして指摘しておきたい。

以上、マギーの愛し愛されたいという内的渴望の観点から、周囲の人物との関わり合いを考察してきた。彼女は愛情の対象となる人を絶えず希求し、そうした対象の存在に鋭敏に反応してはその影響を被り易い。彼女にとって愛の対象は必要不可欠と言えるが、ここで特筆すべき点は、マギーは同時に複数の人間を相手に深い交友関係を保つことが困難な状況に常に置かれているという事実である。父を尊敬するトムと彼に教育を施すことによって自己の未来を託すタリバー氏は固い親子の絆で結ばれており、マギーにとっては

二人とも物心ついた頃からの愛の対象となっているので、彼女の内的葛藤の直接の原因となることはない。しかし、この二人とフィリップは間接的にはあるが敵対関係にあり、トムは自他共にフィリップとの交際を許さない。また、フィリップとスティーブンはマギーを巡る恋敵であり、互いに相手の心中を詮索、邪推する間柄である。トムや父からフィリップ、スティーブンへと心を占める対象が移り変わる過程で、彼女がそれぞれの対人関係の狭間に立たされて苦しい精神的ジレンマの境地に陥るのは決して偶発的なものではない。ある対象に接近しようと試みると、必ず別の対象と離反することを余儀なくされるというパターンが、小説全体を通して見受けられる。二者択一を迫られた時、選択に悩んで両者とも拒むことはマギーには到底できないことである。何故なら、両方を否定することは、他者との関係を全て断ち切って自らを精神的閉鎖状態に閉じ込めてしまい、ひいては自分の生き方そのものを否定し無と化すことになるからである。またそれ以上に、両方との繋がりを喪失することなどマギーの生来の強烈な愛の欲求が許さないであろう。このようにマギーの場合、愛の欲求はある対象との繋がりを保つ強さと同時に、別の対象との繋がりを断つという弱さも持ち合わせていると言える。エリオットはこの小説の中で、互いに相入れない人々の間に置かれた主人公が道徳的判断や選択を迫られるという状況を意図的に構築していると考えることができよう。そうした状況の中で、マギーの一つの価値基準となったのが愛の欲求の強さなのである。

II 過去への執着

この小説には全編を通して、“the past”、“early memories”、“old scenes”など「過去」を意味する言葉が頻繁に見受けられる。特に最大の選択の危機であるスティーブンとの事件の場面には、過去を示す言葉が集中的に多用されていることが分かる。そこでは、過去は“the divine voice within us”(p. 604)、“the sanctuary where sacred relics lay”(p. 606)といった神聖なる域まで高められ、結末部においてはマギーに最終的な判断の啓示を与える重大な役割を担っている。マギーの行動を決定する要因として、前章で論じた

愛の欲求とは別に、この過去への執着を挙げることができる。

マギーにとっての過去は、主に一家の没落以前の子供時代の記憶と分かち難く密接に結びついている。このことは、小説の前半部におけるマギーの子供時代の描写が、後半部の成長後の描写に比べて格段に緻密で精彩を放っていることから明らかである。エリオットは、自伝的内容の濃い前半部分が余りにも長すぎて作品全体の調和を損じていることを指摘され、“My love of the childhood scenes made me linger over them”と自らもこれを認めている。¹⁰ 確かに小説全体の構成の出来という観点から見た場合、後半部の描写は性急かつ不十分であるとの印象を免れない。しかし、マギーの子供時代という過去が彼女の成長後の行動に多大の影響を及ぼし、その価値基準となることを考慮に入れば、その描写の長さも重大な意義と説得力を帯びてくる。読者は、マギーの子供時代を彼女と共に追体験することによって、彼女の過去への執着の理由を納得することができるのである。

エリオットは、幼い日瑞々しい感受性を持って慣れ親しんだ風景や事物は、「第一観念」「first ideas”(p. 222)であり、批判の余地なく我々が容易に受け入れているものだと述べる。

There is no sense of ease like the ease we felt in those scenes where we were born, where objects became dear to us before we had known the labour of choice, and where the outer world seemed only an extension of our own personality: we accepted and loved it as we accepted our own sense of existence and our own limbs. (p. 222)

過去の風物は、まるで手足の如く自分にとって必要不可欠な存在の一部として記憶の中に深く刻まれている。故郷の地は、子供時代をそこで過ごした記憶があるからこそ郷愁を誘うのである。マギーの子供時代の記憶は、懐しの我が家や Dorlcote 水車場、Floss 河や Ripple 川で体験した楽しい思い出と重なり合う。しかもそれはトムとの仲睦まじい兄妹の交流を伴っているからこそ、重要な意味を持っている。二人が連れだって釣りをした時の様子は、

次のように描写されている。

It was one of their happy mornings. They trotted along and sat down together with no thought that life would ever change much for them: they would only get bigger and not go to school, and it would always be like holidays; they would always live together and be fond of each other, . . . (p. 93)

美しい田園風景に囲まれて、離れ離れになることなど夢想だにしなかったトムとの楽しい生活が、マギーの中で「第一観念」となり、彼女にとって人生最良の時として記憶に残っている。そこでは、トムの存在は周囲の風物同様マギー自身の存在の大切な一部と化し、彼なしの子供時代は無に等しいと言っても過言ではない程である。¹¹

こうした二人の子供時代の貴重さを最もよく象徴しているのは、“the golden gates”(p. 270)という言葉である。タリバー氏の破産によって、苦難の生涯へ入っていく子供たちの様子はこう述べられている。

They had gone forth together into their new life of sorrow, and they would never more see the sunshine undimmed by remembered cares. They had entered the thorny wilderness, and the golden gates of their childhood had for ever closed behind them.
(p. 270)

喜びに満ちた生活は茨の荒野に喩えられる悲しみの生活へと変わり、子供時代の「黄金の門」は永久に閉ざされてしまう。これは楽園“Eden”(p. 263)を放逐された人類の姿を想起させる。純粹無垢な子供時代は現世における楽園であり、トムとマギーはアダムとイヴのイメージである。¹² そして水車場や河は楽園を具体的に視覚化した事物であろう。しかし二人が墮落し楽園を追われることになったのは彼ら自身の責任ではなく、その直接の原因はタリバー氏とウエイケムとの訴訟問題にある。子供の世界は、大人の世界の世俗

的抗争に巻き込まれることによって侵害され破壊されていく。更には二人共その醜悪な世界に否応なしに突入せざるを得ない。この部分の懐古的、追憶的描写には、失われていく子供時代を慈しむ作者の心情が満ち溢れている。大人の世界により被害を被ったマギーであったが、その加害者とも言える(マギーは当然そう思っていない)父を患護する彼女は、赤坊を抱擁する乳母に喩えられている。

[Tulliver] seemed to have a sort of infantine satisfaction in Maggie's near presence — such satisfaction as a baby has when it is returned to the nurse's lap. (pp. 278–9)

その姿は幼いキリストを抱擁する聖母マリアのイメージとオーバーラップして見ることもできる。そこでは、大人が脆弱で無力なのに対し、本来卑少な存在であるはずの子供が慈愛に満ちた保護を施すという逆転が生じており、子供は大人を、あるいはその罪を優しく受け止めこれを許す聖なる者の役割にまで高められている。この場面に見られる、子供が大人の倦み疲れた心を救済するという図は、次作 *Silas Marner* において Eppie による Silas の魂の救済、復活という広大なテーマへと発展していくことになる。

父の破産による苦難の人生への出発も然る事ながら、それに端を発するトムの性格の厳格化、硬直化は、マギーの人生に暗く悲しい影を落とす。マギーにとっての過去は決して楽しさに満ちたものばかりでない。過去の悲しみについてエリオットは次のように言及している。

Childhood is only the beautiful and happy time in contemplation and retrospect — to the child it is full of deep sorrows, the meaning of which is unknown.¹³

悲しみの過去を忘却したいと願うのは普遍的な心情であろうが、作者は過去に経験した悲しみも後に回想する際には美しく幸福なものと感じられると述べる。そこにはエリオットの過去への限らない憧憬が窺われる。また悲しみ

は過去の絆を更に深化させるという役割をも担っている。一家の没落後、マギーは残された家族の繋がりをより一層強く意識するようになる。失われて初めて自己の身体の一部と化した過去の貴重さを彼女は実感することができる。父の死という家族共通の悲しみに見舞われたマギーは、破産以来意見の食違いの多い兄に和解を求める。“‘Tom, forgive me — let us always love each other,’ and they clung and wept together”(p. 465). トムの努力が報われて水車場が戻り父の念願が適えられた時、マギーは歓喜の涙を流す。過去の記憶に根ざす人によって過去に属する事物が守り通されたところにマギーの涙の意味がある。過去が喜びばかりでなく悲しみを伴ったとき、より一層重大な意義を帯びてくると言えよう。

こうした過去観を踏まえた時、マギーにとって過去に培った繋がりの最も希薄なスティーブンとの関係が長く存続しないのは明白である。スティーブンは「現在」を象徴する人物と言える。マギーは彼との交友の中に“the warmth of the present”(p. 560)を見出しつつ誘惑に落ち、それを後悔する彼女をスティーブンは“‘There is nothing in the past that can annul our right to each other. . .’”(p. 603). と説得する。彼は過去の絆を“unnatural bonds”(p. 590)と呼び、その束縛から逃れて現在の本能的な感情に身を任せるべきだと提言する刹那主義的発想の持ち主である。過去を重視するマギーは、自分とともに、即ち現在とともに停まることを哀願する彼を残して故郷へ帰る決意をする。スティーブンとの繋がりを断ち切ったものは“the terrible shadow of past thoughts”(p. 590)と述べられ、それは直接的にはフィリップとルーシーの面影を指す。トムに及ばないものの、彼らもまたマギーの子供時代という過去の絆で結ばれた人々である。ルーシーは幼少の頃から従姉妹として親しくした仲であり、昔から穏やかな親交を育んできたフィリップは、スティーブンとの関係に苦悩するマギーにとって今や救いを救めるべき「外なる良心」“a sort of outward conscience”(p. 525)とまでなっている。過去の絆である二人を犠牲にして幸福を求めることは、マギーには絶対に不可能である。

[I]t would rend me away from all that my past life has made

dear and holy to me. I can't set out on a fresh life, and forget that — I must go back to it, and cling to it, — else I shall feel as if there were nothing firm beneath my feet. (p. 605)

更に、マギーはこの二人の背後にトム姿を見ている。流れゆく船上で微睡むマギーの夢の中にフィリップとルーシーを乗せた小船が現れる。しかしフィリップと思われた人はトム姿に変わり、マギーを無視して通過してしまう。マギーが兄の名を呼び手を伸ばした瞬間、彼女の船は転覆してしまう。現在の幸福や快楽に執心し過去を無視した者は、罪の報い“A horrible punishment . . . for the sin of allowing a moment's happiness”(p. 562)を受け、自己の存在価値を喪失する運命にあるのである。K. M. Newtonはこの状態を、“an unstable or fragile sense of identity or a spiritual lack which may lead to alienation or despair”と表現している。¹⁴ 過去の繋がりやの強い関係という点を考えた時、マギーにとって、物心ついた時から傍にいたトムの方が12歳の頃知り合ったフィリップより大きな存在であることは明らかである。トムに密会を禁じられた彼女は、“I desire no future that will break the ties of the past. But the tie to my brother is one of the strongest”(p. 564). とフィリップに対し離別の決意を告げざるを得ない。最終的にマギーとフィリップは結ばれず、マギーとトムは死という形を取ったとはいえ、和解するという設定もまた、フィリップに対するトムの優位性を表すものであろう。以上のように、マギーは過去の絆のより深い人により強い愛着を示す性質がある。スティーブンからフィリップ、そしてトムへと後戻りした行動の過程には、過去の絆の深さが大きく関与している。

現在は過去とは切り離すことはできない。それは過去からの「有機的繋がり」¹⁵の中で存在し意義を与えられる。過去を否定することは現在を否定することになる。故に自らの価値観や指標を過去に置くことは決して誤りではない。しかしマギーの思考や態度には、眼前にある現実に向背して過去に執着しようとする傾向が余りにも強すぎる。彼女の精神構造においては、現在から過去へのフィードバックが容易にかつ頻繁に起り得る。現存する現在を積極的に肯定できないマギーには、当然の事ながら明るい未来への展望は

望めない。未来を思い描くことはあっても、その眺望は大抵 “only future scenes of home-sorrow” (p. 373) といった消極的、悲観的なものである。未来への時間の流れは、マギーが成長し前進し続けていく際に必要不可欠のものである。時という絶対的な自然の流れに逆らって、過度に過去に固執しようとするところにマギーの悲運の要因があるように思われる。

以上の点を踏まえて、結末の洪水の場面の意味を検討してみたい。杜絶えることのない河の流れは、永遠に終ることのない時間の流れを示していると考えられる。洪水の中で一人ボートで流されるままになっているマギーは、水車場と肉親のことが気掛りとなり、遙か下流に流されてしまわぬよう必死に本流の外へ漕ぎ出そうと試みる。過去に培われた記憶の一部である水車場に辿り着こうとして、現在から未来へと流れ行く時間に逆らってその外へ脱出を図るのである。その結果、過去に培われた懐かしいトムとの和解には成功するが、現在に背を向けるマギーには死が待ち受けることになる。兄妹が河の中で死ぬという設定も暗示的である。フロス河やリプル川もマギーの過去の象徴であることは先に述べた通りである。“the long companion of my existence” (p. 222) である河の中に二人が抱き合って埋没していく、それは即ち、人生の終りに完全に過去の絆に被護され、過去の原点に回帰したことを指すと言えるだろう。

The boat reappeared — but brother and sister had gone down in an embrace never to be parted — living through again in one supreme moment, the days when they had clasped their little hands in love, and roamed the daisied fields together. (p. 655)

二人は肉体的には死に見舞われ滅びることになったが、精神的には和解することによって、昔小さな手を取り合って雛菊の咲く野を彷徨した崇高な一時そのままに永遠に生き続けることになる。マギーにとって、何の苦難もなく生きる喜びを享受できたのは、樂園を髣髴とさせる懐かしい子供時代の日々であったことが想起されよう。苦悩続きの生涯であるマギーに対してエリオ

ットは、“Was her life to be always like this? — always bringing some new source of inward strife?” (p. 552) と同情を寄せるが、そのマギーの最期に訪れたのは “the transition of death, without its agony” (p. 651) である。マギーにとって肉体的死は、苦悶のない魂の救済であり永遠の安息を意味していると言える。

III 愛情と過去

以上、マギーの諸々の行動に一貫して見受けられる価値規範を、愛の欲求と過去への執着という二つの観点から考察してきた。マギーの心理は厳密に見れば、互いに相入れない人物同志の間を機に応じて何度も往復し、その動向も幾多の紆余曲折があって決して一様ではない。しかし概して彼女は、前者の要求に従いトムからフィリップ、そしてスティーブンへと魂の拠り所を求めて彷徨い、後者の要求に従ってまた元へ回帰したと言えそうである。故に、愛の欲求と過去への執着は互いに矛盾する対立概念であり、後者は前者に優先しているように感じられるが、実際は両者は切り離して考えることはできない。Thomas Pinney は両者の関連性について次のように述べているが、これは妥当であろう。

Old and familiar objects and associations are cherished not because they possess a necessarily superior intrinsic value, but because they have drawn to themselves those affections which supply all the meaning of life, and have become inseparable from the feelings which exalt them. The affections, because freshest and most intense in our early life, are inevitably backward looking.¹⁶

過去は決して常に正しく善なるものではない。それは深い愛情に支えられて初めて完全なものとなり、マギーの人生における他のあらゆる要求に優先さ

れる影響力を持つ。この点についてエリオット自身、小説の中でこう言及している。

But heaven knows where that striving might lead us, if our affections had not a trick of twining round those old inferior things, if the loves and sanctities of our life had no deep immovable roots in memory. (p. 222)

本論で述べたマギーの周囲を取り巻く人々は、現在を象徴するスティーブンを除けば、程度の差はあれマギーの過去の絆に培われた存在であり、その全てが彼女の求めて止まぬ愛の対象となっている。トムへの回帰を促されたのは、彼が過去に属する思慕の対象だったからであり、結末の場面は兄妹が幼少の頃育み交した愛情の再確認及び再認識を意味している。フィリップやルーシーに対する想いも同様の理由による。ドドスン家の人々も確かにマギーの過去の記憶の一部ではあるが、彼女が終始彼らとの間に距離を置き反発を続けるのは、彼らに対する愛着心が欠落している為であろう。

過去に礎を置く愛情は時折、“pity”(p. 582)、“faithfulness”(p. 602)、“conscience”(p. 602)といった言葉と併置され換言されている。“I see one thing quite clearly — that I must not, cannot seek my own happiness by sacrificing others”(p. 571). と言って誘惑を逃れたマギーの心の根底には、これらの道徳的感情が存在している。この意味で愛情に支えられた過去の記憶は、“the infallible sign of moral health”¹⁷ を示していると言える。ここで注意したいのは、マギーの道徳は世間一般で公認されている道徳とは必ずしも一致しないということである。世間的な道徳観に従えばマギーはスティーブンと結婚して帰郷するのが道理であり、世評に反した行動をとった彼女は非難的となり故郷に居場所を失うことになる。エリオットは道徳的判断の在り方について次のようにコメントしている。

[M]oral judgments must remain false and hollow, unless they are checked and enlightened by a perpetual reference to the

special circumstances that mark the individual lot. (p. 628)

道徳的判断は単に社会的・世俗的常識によって決定されるのではなく、個人における個々の状況を常に的確に把握し吟味することによって真の意味を持つというのが作者の主張である。マギーの行動を決定づけたのはこうした自己判断だったのであり、スティーブンとの結婚に賛同することはフィリップやルーシーだけでなく、何よりも自分自身を墮落させるものだという意識が働いているのである。確かに彼女の自己滅却的な行動は、事態を全面的に回復させ、犠牲となったフィリップやルーシーに何らかの実質的な利益及び償いをもたらす訳でもない。¹⁸ しかしそれは過去に培われた愛情の絆に対する裏切りを回避することとなり、その結果マギーは二人と和解することによって心の繋がりを回復し心の平安を得ることができるのである。このように、マギーの判断は一般常識的な道徳観より一層深い個人内の道徳意識から生じたものであり、それは換言すれば周囲の人々との関係の中における自己の存在とは一体何かを問う自己認識の問題である。そしてその自己認識への最大の拠り所となったのが、愛の絆に支えられた過去観なのである。エリオットはこの作品において、人間の思考及び行動を、周囲の人々に対する愛情という空間的な面と、過去に対する絆という時間的な面の両側から捉え、両者を強く関連づけて提示することにより人間存在の在り方を追求している。

NOTES

- 1 Leslie Stephen, *George Eliot* (London: Macmillan, 1924), p. 86.
- 2 Gordon S. Haight, ed. *The George Eliot Letters* (London: Oxford Univ. Press, 1954), III, 318.
- 3 George Eliot, *The Mill on the Floss*, ed. A. S. Byatt (1860; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1988), p. 514. 以下 *The Mill on the Floss* からの引用はすべて本文中に頁数を記載する。
- 4 George Eliot, *Felix Holt: The Radical*, ed. Peter Coveney (1866; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1982), p. 129.
- 5 マギーのこの姿はエリオット自身の投影と言えよう。J. W. Cross, *George Eliot's*

- Life, as Related in Her Letters and Journals* (1885; rpt. Boston: Lana Estes & Company, 1898), I, 11.
- 6 Letters, I, 284.
- 7 Joan Bennett, *George Eliot: Her Mind and Her Art* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1948), p. 119.
- 8 例えば *Silas Marner* においては、Silas が長年唯一の心の支えとしていた金貨が盗まれ放心状態にある時に、後の彼の生き甲斐となる幼子の Eppie が彼の家に迷い込む。また *Middlemarch* においては、Dorothea Brooke がローマでの新婚旅行中に夫 Edward Casaubon の不毛性に失意を感じ初めた頃、将来再婚相手となり彼女の魂を救う Will Ladislaw に再会する。
- 9 スティーブンのキャラクターとしての欠陥に対して様々な指摘が為されてきたのは周知の事実である。小論ではこの点には関与せず、彼のマギーに対する役割及びその影響の面のみに注目したい。
- 10 Letters, III, 374.
- 11 紙面の都合上割愛したが、エリオットが兄の Issac への想いを綴った詩“Brother and Sister”は、子供時代仲の良かった兄妹が成長するにつれ離れ離れになってしまう悲しみを詠んだものであり、この小説で具現化された兄妹の固い絆をより深く理解するための手立てとなるので参照されたい。George Eliot, “Brother and Sister,” in *A George Eliot Miscellany: A Supplement to her Novels*, ed. F. B. Pinion (London: Macmillan, 1982), pp. 148–53.
- 12 R. T. Jones, *George Eliot* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1970), p. 26.
- 13 Letters, I, 173.
- 14 K. M. Newton, *George Eliot: Romantic Humanist: A Study of the Philosophical Structure of her Novels* (London: Macmillan, 1981), p. 103.
- 15 Thomas Pinney, “The Authority of the Past in George Eliot’s Novels,” in *George Eliot: A Collection of Critical Essays*, ed. George R. Creeger (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1970), p. 40.
- 16 Pinney, p. 41.
- 17 Pinney, p. 47.
- 18 Walter Allen, *George Eliot* (New York: Macmillan, 1964), p. 115.